

脊椎動物

大型・中型哺乳類

上田弘則¹

目的

本調査は、富士北麓地域に生息する哺乳類相（特に中・大型哺乳類）を明らかにすることを目的として実施したものである。これまでに富士北麓地域の哺乳類相を明らかにしてきた調査はいくつかあるが（黒田 1971、山梨県・山梨県自然保護教育振興会 1997）、いずれも聞き取り調査と痕跡調査を主としている。本調査では、痕跡調査に加えて近年動物相の調査で利用されるようになってきている自動撮影装置を用いた調査も行ない、より客観的で信頼度の高い生息情報の収集につとめた。

調査方法

ライトセンサスおよび踏査

2001 年度にはライトセンサスおよび踏査による痕跡調査を行なった。ライトセンサス法とは、時速 10km 程度の速度で車を走行させ、車の両脇をライト（Brinkmann 社製、Q-Beam Max Million Spotlight）で照らし、発見した動物種、発見時刻、地点を記録するものである。ライトセンサスによる調査は 2001 年 9 月 5 日に、中の茶屋から富士山五合目までの滝沢林道約 17km で行なった。踏査による痕跡調査は、吉田口登山道（五合目から中の茶屋の間）および精進口登山道（五合目から大室山までの間）で、それぞれ 2001 年 9 月 20 日、10 月 25 日に行なった。登山道ならびに登山道沿いの林内を踏査し、動物の痕跡（糞、足跡、掘り起こしなど）を記録した。

自動撮影カメラ

上記の方法では確認できる種数が限られる上、糞や足跡などの痕跡では動物種の判断が難しい場合もあるため、近年哺乳類相の把握に使用されるようになった自動撮影装置を用いた調査を 2002 年 6 月から 11 月まで行なった。共通調査地

点 7 地点に自動撮影装置を設置した。自動撮影装置は赤外線センサー（Trail Master TM550、Goodsons & Associates 社）と自動撮影用カメラ（Yashica T5、Kyocera 社）を組み合わせて使用した。赤外線センサーは動物の発する赤外線を感知して、自動的に撮影できる仕組みになっている。このセンサーは作動時間と感度の設定が可能である。作動時間は 18:00 から 6:00 まで、感度の設定はネズミ類でもある程度は撮影できるように設定した。感度の値には P 値と Pt 値がある。P はイベントとして認知されるまでに必要とされる赤外線のパルス数で、値が大きいほど感度が鈍くなる。Pt は必要なパルス数が得られるまでの時間の設定値である。P=5、Pt =2.5 でテン *Martes melampus* やノウサギ *Lepus brachyurus* 程度の動物でも感知するが、オコジヨ *Mustela erminea* のような小型種も撮影できるように P=3、Pt =2.5 に設定した。各調査地点に 1 台設置し、誘引餌として鶏がら、落花生、イカの燻製などを使用した。

調査日および調査地点

調査日、調査地点、調査内容、調査者は以下のとおりである。

2001年

9月 5日	滝沢林道	ライトセンサス	上田・北原・姜・本郷
9月 20日	吉田口登山道	痕跡調査	上田・北原・姜・渡辺・本郷・平田
10月 25日	精進口登山道	痕跡調査	上田・北原・姜・渡辺

2002年

6月 5日	St. 6・St. 7	自動撮影カメラ	上田・小川
6月 10日	St. 1・St. 2・St. 3	自動撮影カメラ	上田・小川
6月 21日	St. 4・St. 5	自動撮影カメラ	

¹ 山梨県環境科学研究所

	上田・小川	
6月 30日	St. 6・St. 7	自動撮影カメラ 上田
7月 11日	St. 1・St. 2・St. 3	自動撮影カメラ 上田
7月 26日	St. 4・St. 5	自動撮影カメラ 上田
8月 15日	St. 6・St. 7	自動撮影カメラ 上田
8月 20日	St. 1・St. 2・St. 3・St. 4・St. 5	自動撮影カメラ 上田
9月 17日	St. 6・St. 7	自動撮影カメラ 上田
9月 19日	St. 1・St. 2・St. 3	自動撮影カメラ 上田
10月 7日	St. 4・St. 5	自動撮影カメラ 上田
11月 14日	St. 1・St. 2・St. 3・St. 6	自動撮影カメラ 上田・小川
11月 22日	St. 4・St. 5	自動撮影カメラ 上田・小川
11月 24日	St. 7	自動撮影カメラ 上田・小川

結果および考察

本調査の結果、表 1 に示したとおり 4 目 9 科 13 種が確認された。本調査では、ニホンザル *Macaca fuscata* のオスの成獣が目撃されたが、群は確認されておらず、定着しているとはいえない。また、過去の富士山地域の動物相の調査(黒田 1971) では 4 目 7 科 11 種が確認されており、本調査よりも 2 科 2 種少ないが、これはニホンザルとハクビシン *Paguma larvata* が含まれていないためである。本調査では、ハクビシンが山地帯・溶岩帯の St. 4、5、6 の 3 地点で確認されていることから、比較的標高の低い地域では定着していると考えられる。

滝沢林道で行なったライトセンサスの結果、発見できたのはテン、キツネ *Vulpes vulpes* の中型獣だけであった。吉田口登山道で行なった踏査の結果、ニホンジカ *Cervus nippon* の糞を多数発見した。標高 2,150m から 1,200m の地点まで一様にシカの糞がみられた。その他カモシカ *Capricornis crispus* のため糞が標高 1,800m の地点で発見された。精進口登山道で行なった踏査の結果、標高 1,850m の地点でカモシカの糞がみ

られた。シカの痕跡は 1,800m、1,200m、1,000m の地点で断続的にみられた。1,200m 付近ではイノシシ *Sus scrofa* による掘り起こしと思われる痕跡がみられた。

共通 7 地点での自動撮影装置の結果を中心に動物種ごとに特徴的な点を以下にまとめた。

St. 1、2、3 で確認された動物種はほぼ共通していた。中型動物ではノウサギ、テン、大型動物ではニホンジカ、カモシカが確認された。なかでも、カモシカは St. 1、3 以外の共通調査地点では確認されておらず、自動撮影カメラの結果では高標高地域でのみ生息が確認された。ただし、標高 880m の地点でも目撃されており、低標高地域でもまれに確認されることもある。カモシカは本来ブナ *Fagus crenata* やミズナラ *Quercus crispula* が優占する落葉広葉樹林や針広混交林に生息するが、富士北麓高標高地域はシラビソ *Abies veitchii* の優占した林が広がっており、あまりカモシカにとって好適な環境とはいえない。St. 3 のように樹冠が閉じたシラビソ林では、下層植生が発達せず、カモシカの食物となる木本の葉や双子葉草本がほとんど得られない。しかし、カラマツ *Larix kaempferi* やダケカンバ *Betula ermanii* の優占する林では下層植生が比較的発達しており、このような環境をうまく利用している可能性がある。

山地帯・溶岩帯の St. 4、5、6 で共通して確認されたのは、テンとハクビシンとニホンジカの 3 種であった。ハクビシンは、高標高地点では確認されておらず、また草原である St. 7 でも確認されていないことから、自動撮影の結果では比較的標高の林内に生息していると考えられる。テンについては、高標高から低標高まで非常に幅広い地点で確認され、最も多くの地点で確認された種のひとつである。テンは樹上空間を頻繁に利用するため森林を主な生息環境とすることから、草原である St. 7 で確認されなかったものと考えられる。富士北麓地域のテンの糞分析の結果によると(中村 2001)、その食性は季節的に大きく変動し、3-5 月はネズミ類などの哺乳類、6-8 月にはスズメバチやオサムシなどの昆虫、9-2 月はサルナシ *Actinidia arguta* などの果実を利用することが明らかになっている。このように哺乳類・昆虫・果実など幅広い食性を持つことがさまざまな環境で生息することを可能にしていると考えられる。タヌキ *Nyctereutes procyonoides* は、共通

表1 確認された大型・中型哺乳類

No.	共通調査地点(St.)	林道・登山道												
		1	2	3	4	5	6	7	滝沢	吉田	精進	他		
サル目 オカザル科														
1 ニホンザル ウサギ目 ウサギ科	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth)													●
2 ノウサギ ネコ目 クマ科	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck	○	○	■	▲			○		■	■	●		
3 ツキノワグマ イヌ科	<i>Ursus thibetanus</i> (G. Cuvier)				▲			▲						●
4 キツネ	<i>Vulpes vulpes</i> Linnaeus			●	▲		▲	○	○					●
5 タヌキ イタチ科	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray)				○	○								●
6 テン イタチ	<i>Martes melampus</i> (Wagner)	○	○	○	○	○	○		○	■	■	●		
7 イタチ	<i>Mustela itatsi</i> Temminck													●
8 オジヨ	<i>Mustela erminea</i> Linnaeus													●
9 アナグマ ジャコウネコ科	<i>Meles meles</i> (Linnaeus)													□
10 ハクビシン ウシ目 イノシシ科	<i>Paguma larvata</i> (C. E. H. Smith)				○	▲	○							□
11 イノシシ シカ科	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus							○					△	●
12 ニホンジカ ウシ科	<i>Cervus nippon</i> Temminck	○	○	○	○	○	●	●		■	■	■		
13 カモシカ	<i>Capricornis crispus</i> Temminck	○		●						■	■	■		
	出現種類数	4	3	5	7	4	5	4	2	2	5	4		

○：自動撮影、●：目視、□：死体、■：糞、△：掘り起こし

▲：山梨県環境科学研究所「プロジェクト研究・富士山の自然特性に関する研究」平成13年度報告書からの引用

調査地点のSt. 4, 5の2地点で確認されている他は、St. 24, St. 29, St. 35で確認されており、青木ヶ原周辺地域で多く確認されている。イノシシは、共通調査地点ではアカマツ *Pinus densiflora* 林のSt. 6でのみ確認されている他、精進口登山道沿いの1,200mの地点で掘り起こしの痕跡がみられている程度で、確認例が少なかった。しかし、大沢崩れ北側(2,600m)の高標高地域でも確認例があった。ニホンジカは高標高から低標高まで幅広い地点で確認され、最も多くの地点で確認された種のひとつである。しかし、日光や丹沢山地のようにニホンジカの高密度化による大径木の樹皮剥ぎや下層植生の退行など自然植生への影響は、富士北麓地区ではみられていない。一方で、近年、標高1,500mの鳴沢地区のシラベ植林地で冬季を中心にニホンジカによる樹皮採食被害が発生しており(姜ら 2001)、近年ニホンジカの密度が増加している可能性がある。草原であるSt. 7では、キツネが頻繁に撮影されたが、このキツネは人に馴れており、餌付けされている可能性がある。キツネはこの他でもSt. 3, 4, 6で確認されており、比較的広い範囲で生息が確認され

ている。また、山梨県環境科学研究所(2002)による自動撮影カメラの結果では、富士山の六合目および七合目でもキツネが出没しており、高標高地域でも確認された。ツキノワグマ *Ursus thibetanus* は、St. 4とSt. 7付近(山梨県環境科学研究所 2002)の他に、St. 18で自動撮影装置によって確認されているが、全体的に確認数は少なかった。生息が確認された地域の中で、St. 4周辺は富士北麓地域の中でも比較的広い範囲に落葉広葉樹林が残っており、木本の新芽やヤマザクラ *Prunus jamasakura* などの漿果やブナ・ミズナラなどの堅果が利用可能なため好適な生息環境であると考えられる。

本調査では、ニホンザルについては、中の茶屋と富士桜荘でオスの成獣が目撃されているが、その際に他の個体は確認されておらず、群外オスと考えられる。富士吉田市、河口湖町の御坂山系側ではニホンザルの群の生息が確認されているが、現在のところ富士北麓地域では群は確認されていない。アナグマ *Meles meles* については、国道139号で轢死体が1例確認された他、St. 4とSt. 29で自動撮影装置によって撮影された。全体

的に確認例は少ない。アナグマはもともと山地帯下部から丘陵部にかけて生息することから、本調査での確認例は少なかったものと考えられる。イタチ *Mustela itatsi* については、天神峠付近と St. 29 の 2 例確認されたのみで、確認例が非常に少ない。オコジョについても、比較的高標高地域で 1 例の目撃があるのみで、確認例が非常に少ない。一般的に高山帯を中心に生息するといわれていることから、調査を行なった地点の微生息環境が適していなかったか、もしくは生息密度が低かったことが原因と考えられる。

本調査のニホンザルとハクビシンを除いた各動物種の確認情報は、全体的には過去の富士山地帯の動物相(黒田 1971)の結果と同じである。ただし、イタチとニホンジカに関しては大きく異なる。まず、イタチについては過去の調査では二合目以下の亜高山帯下部から山地帯にかけて多く確認されたという結果が出ているが、本調査では目撃例が 2 例のみであった。最近 20 年で富士北麓地域でのイタチの個体数密度が減少した可能性も考えられるが、1999 年に精進口登山道と滝沢林道で行なわれた痕跡調査ではイタチの糞が複数確認されている(山梨県環境科学研究所 1999)ことから、本調査ではたまたまイタチの生息確認例が少なかったという可能性もある。過去の富士山地帯の動物相(黒田 1971)の結果ではニホンジカについては密度が低く、少数が分散しているという報告であったが、本調査では高標高から低標高まで広く生息が確認され、上記のとおりシラベ植林地にも樹皮被害が発生するようになったことから、近年密度が増加している可能性がある。

引用文献

- 黒田長久(1971)富士山地帯の動物相. 富士山総合学術調査報告書, p723-855 富士急行株式会社, 山梨.
- 姜兆文・北原正彦・渡辺牧・上田弘則(2001)富士北麓のニホンジカの林業被害について. 山梨県環境科学研究所ニューズレター, Vol. 5 No. 2.
- 中村俊彦(2001)富士北麓におけるニホンテンの食性及び行動圏. 東京農工大学大学院修士論文, P19.
- 山梨県・山梨県自然保護教育振興会(1997)希少種を主とする山梨県の野生鳥獣生息調査, 山梨県, 山梨.
- 山梨県環境科学研究所(1999)プロジェクト研究・富士山の自然特性に関する研究. 平成 10 年度報告書, 山梨県環境科学研究所, 山梨.
- 山梨県環境科学研究所(2002)プロジェクト研究・富士山の自然特性に関する研究. 平成 13 年度富士北麓における中型哺乳類の生息状況調査報告書, 山梨県環境科学研究所, 山梨.

参考文献

- 阿部永(1994)日本の哺乳類. 東海大学出版会, 東京, P195.
- 日高敏隆(1996)日本動物大百科第 1 巻哺乳類 I. 平凡社, 東京, P156.
- 日高敏隆(1996)日本動物大百科第 2 巻哺乳類 II. 平凡社, 東京, P155.

小型哺乳類

白石浩隆¹

調査目的および方法

富士山北麓に生息する哺乳類相を把握するために採捕および目視による調査を実施した。

コウモリ類については、かすみ網・捕虫網・巣箱を用いた調査を実施した。かすみ網は、森林内のコウモリのとおり道になりそうなところを任意で選定し設置した。捕虫網は主に洞穴調査時に、休息中のコウモリを捕獲するのに用いた。巣箱は、三合目・山地帯夏緑広葉樹林・溶岩帯針葉樹林の3地点に各20個・計60個を設置した。

モグラ類は、園芸用の植木鉢を利用したピットホールトラップを用いて、共通調査地点7カ所の他にゴルフ場を調査ポイントに選定し、この8カ所において各10個・計80個を設置した。また、筒罟を用いて採捕による確認も実施した。

リス・ムササビ・モモンガ・ヤマネについては、巣箱を用いた調査を行なった。ホンドモモンガ用の巣箱を亜高山シラビソ自然林と三合目に各5個・計10個、ヤマネ用の巣箱を山地帯二次草原を除く共通調査地点6カ所に各50個・計300個設置した。

ネズミ類は、シャーメントタイプのライブトラップを用いて共通調査地点7カ所の他に St. 59 (山地帯二次草原) を調査ポイントに選定し、この8カ所において各50個ずつを1昼夜設置し定量調査を行なった。

以上の他、鳥類調査他移動中などの際に付随的に確認された種(哺乳類全般)や死体の拾得により確認された種も記録した。また、今回、記録は取れなかったが、ホンドモモンガなど樹上で活動する哺乳類を確認するために、熱感知センサーによる自動撮影装置も試みた。

調査日および調査者

調査日、調査地点、調査内容、調査者は次のとおりである。(PTはピットホールトラップの略)

2001年

8月	6日	洞穴確認・任意採集	白石
8月	12日	洞穴確認・任意採集	白石
8月	13日	洞穴調査	白石・篠田・萩原
8月	14日	洞穴調査・かすみ網	白石・篠田・瀬子
8月	18日	任意採集	白石
8月	19日	洞穴調査	白石・篠田
8月	20日	洞穴調査	白石・篠田・伊藤
8月	27日	洞穴調査	白石・篠田・伊藤
9月	2日	洞穴確認・任意調査	白石・外川
9月	17日	洞穴調査・かすみ網	白石・篠田
9月	18日	洞穴調査	白石・篠田
9月	25日	洞穴調査・かすみ網	白石・篠田
9月	26日	洞穴調査	白石・篠田
10月	15日	洞穴調査	白石・篠田
12月	16日	任意採集	白石
12月	17日	任意採集	白石

2002年

4月	8日	任意採集	白石
4月	15日	任意採集	白石・渡辺
4月	16日	任意採集	白石・篠田
4月	23日	任意採集	白石
4月	24日	自動撮影設置・任意採集	白石
5月	1日	自動撮影点検・任意採集	白石
5月	12日	洞穴調査・任意採集	白石・笹川
5月	14日	自動撮影点検・任意採集	白石・笹川
5月	21日	PT設置・自動撮影点検	白石・横尾
5月	22日	PT点検・自動撮影点検	白石
5月	23日	PT設置・自動撮影点検	白石・横尾
5月	26日	PT設置・自動撮影点検	白石・横尾
5月	29日	巣箱・PT設置	白石・笹川
5月	30日	巣箱・PT・自動撮影点検	白石
5月	31日	巣箱・PT点検	白石
6月	6日	巣箱・PT点検・再設置	白石・笹川
6月	9日	巣箱・PT・自動撮影点検	白石

¹ 自然体験計画ひめねずみ社

6月 11日 巣箱・PT・自動撮影点検 白石
 6月 12日 巣箱・PT点検 白石
 6月 13日 洞穴調査 白石・篠田・伊藤・瀬子
 6月 19日 PT点検・自動撮影再設置 白石
 6月 20日 洞穴調査 白石・篠田・伊藤
 6月 21日 巣箱・PT点検 白石
 6月 23日 巣箱・PT・自動撮影点検 白石
 6月 24日 巣箱設置・PT・自動撮影点検 白石・
 笹川
 6月 30日 PT・自動撮影点検 白石
 7月 1日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 設置)
 白石
 7月 2日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 回収)
 白石
 7月 16日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 設置)
 白石
 7月 17日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 回収)
 白石
 7月 19日 洞穴調査 白石・笹川・外川
 7月 26日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 設置)
 白石・篠田
 8月 2日 PT・巣箱点検 白石
 8月 3日 PT・巣箱点検 白石
 8月 4日 PT・巣箱点検 白石
 8月 11日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 設置)
 白石
 8月 12日 小型齧歯類調査 (トラップ^o 回収)
 白石
 8月 21日 かすみ網 白石
 8月 23日 洞穴調査・PT点検・自動撮影設置 白
 石
 9月 25日 巣箱点検・自動撮影設置 白石
 10月 3日 巣箱点検・自動撮影設置 白石
 10月 9日 かすみ網 白石・外川
 10月 10日 かすみ網 白石・笹川
 10月 16日 任意採集 白石
 10月 27日 PT回収 白石

調査結果

モグラ目・コウモリ目・ネズミ目の3目の小型哺乳類については、7科22種の哺乳類が確認された。(表1)

このうち、環境省の保護上重要な野生生物種(環境省 2002)において、いわゆる貴重種として選定されている種として、ミズラモグラ *Euroscaptor mizura*、ヒメホオヒゲコウモリ

Myotis ikonnikovi、ウサギコウモリ *Plecotus auritus*、テングコウモリ *Murina leucogaster*、ヤマネ *Glirulus japonicus*の5種が確認された。ヤマネは国指定天然記念物でもある(表2)。

なお、本調査報告において、小型哺乳類の分類、配列、和名、学名は東海大学出版会(1994)「日本の哺乳類」に従い、同書の検索表を用いて同定した。ただし、アズマモグラおよびコウベモグラの学名は、阿部永・横畑泰志編(1998)「食虫類の自然史」(比婆科学教育振興会)を参考に採用した。

また、本調査における小型哺乳類の分類では、亜種レベルの分類を採用していないため、*Myotis ikonnikovi* ヒメホオヒゲコウモリは、環境省 RDB カテゴリーに対して *M. i. Fujiensis* フジホオヒゲコウモリに相当するとして絶滅危惧Ⅱ類としている。同様に、*Euroscaptor mizura* ミズラモグラは、*E. m. mizura* フジミグラモグラに相当するものとして準絶滅危惧として記載している。

考察

富士山麓における小型哺乳類(モグラ目・コウモリ目・ネズミ目)において、その生息の可能性のある種のうち、コウモリ類をのぞいてそのほとんどを確認することができた。

コウモリ目については、十数種が生息している可能性があり、本調査での確認数は少ないといえるが、実際の捕獲作業においてコウモリ類の確認は困難を要するため、将来において効率のよい調査を実施する必要がある。コウモリ類については、後章「溶岩洞のコウモリ類」にて追記する。

モグラ目は、2科7種を確認した。そのうちモグラ科のヒミズ類については、青木ヶ原樹海など溶岩上に形成された森林では、ヒメヒミズ *Dymecodon pilirostris* を見ることができるとはほとんどない。この2種は、その土壌条件により明らかに住み分けていると考えられる。また、五合目など亜高山帯においてヒミズよりもヒメヒミズの生息が優位になるのも単に標高による生息状況の変化というよりも成熟した森林の不足により土壌状態が貧弱であったり溶岩性の土壌のためにヒミズの生息が制限されているように思われる。また、モグラ類のうち、よりトンネル生活者としての進化を遂げているアズマモグラ *Mogera imaizumii* は、本調査地である富士北麓

表1 確認された小型哺乳類

No.		調査地点(St.)							他
		1	2	3	4	5	6	7	
	モグラ目								
	トガリネズミ科								
1	トガリネズミ			○					○
2	シネズミ								○
	モグラ科								
3	ヒメヒズメ		○				○		○
4	ヒミス				○				○
5	ミズラモグラ				○				○
6	アズマモグラ				○		○		○
7	コウベモグラ								○
	コウモリ目								
	キカシラコウモリ科								
8	キカシラコウモリ								○
9	コキカシラコウモリ				○				○
	ヒナコウモリ科								
10	ヒメホオヒゲコウモリ				○				
11	モモジロコウモリ				○				○
12	アブコウモリ								○
13	ウサギコウモリ				○				○
14	テングコウモリ								○
	ネズミ目								
	リス科								
15	ニホンリス	○			○	○	○		○
16	ホンドモモンガ			○					○
17	ムササビ				○				
	ヤマネ科								
18	ヤマネ		○		○				○
	ネズミ科								
19	スミスネズミ	○			○				
20	ハタネズミ								○
21	ヒメネズミ	○	○	○	○	○	○		○
22	アカネズミ				○	○		○	○
	出現種類数	3	3	3	13	3	4	1	

全域に生息しているが、溶岩地形にはほとんど生息していない。また、ミズラモグラは、2個体のみの確認にとどまり、その生息数が少ない。コウベモグラ *Mogera wogura* については、青木ヶ原溶岩流の南縁のゴルフ場にて1個体が確認された。コウベモグラは、大陸からの西日本全域に生息する種で、富士山麓では静岡方面より山梨県側に進出していると言われている。このゴルフ場では、アズマモグラが数個体確認されていることから、青木ヶ原溶岩流でその東進を阻まれていることが本調査でも明らかとなった。今後、青木ヶ原樹海が、その溶岩流を覆い尽くすほど土を形成したとき、コウベモグラが山梨県側から関東方面に進出することも予想される。

ネズミ目は、3科8種が確認された。このうちリス科については、ニホンリス *Sciurus lis* は、富士山麓のほぼ全域に分布しており、植林・自然林を問わず森林限界以下の森林地帯に広く生息している。ムササビ *Petaurista leucogenys* およびホンドモモンガ *Pteromys momonga* の滑空技術を持つリス科動物は、確認情報こそ少ないものの、

その生息が確認できた。山麓の神社などでムササビの生息情報が多く、低山帯にムササビ、亜高山帯にホンドモモンガが生息することによって、この2種は住み分けているものと思われる。

ネズミ科については、共通調査地を含む8地点でシャーマンタイプのライブトラップを用いた定量調査(トラップの設置数は各地点50個)を実施し、その結果は、表3のとおりである。この定量調査では、富士山麓全域においてヒメネズミ *Apodemus argenteus* の優占度が圧倒的に高いことがわかる。一般にヒメネズミは、低山から高山帯の極相林の特徴である落葉・落枝層が厚いところを好むと言われているが、富士山麓においては、溶岩流の上に発達した比較的表土の薄いところにも多く生息している。また、対照的にアカネズミ *Apodemus speciosus* は、亜高山帯以下の森林に多く、草原にも多い。これは、ヒメネズミが隙間や空洞の多い溶岩の複雑な地形を立体的な空間として利用することを好むことを表していると思われる。アカネズミやハタネズミ *Microtus montebelli* は、自ら積極的にトンネルを掘るこ

表2 確認された小型哺乳類の貴重種カテゴリー

No. 目	科	種	環境省 (2002)	神奈川 (1995)	埼玉 (2002)	東京 (1998)	その他	
1	モグラ	トカリスミ	準絶滅危惧	希少種	地帯別危惧 準絶滅危惧	地域限定種 希少種		
2		ジネスミ						
3	モグラ	ヒメヒミス						
4		ヒミス						
5		ミスラモグラ						
6		アスマモグラ						
7		コウモグラ						
8	コウモリ	キカシラコウモリ	絶滅危惧II類	減少種	準絶滅危惧	希少種	天然記念物(国)	
9		コキカシラコウモリ		減少種	準絶滅危惧	希少種		
10	ヒナコウモリ	ヒメホヒゲコウモリ	絶滅危惧II類	減少種	絶滅危惧II類	希少種		
11		モモシロコウモリ						
12		アブラコウモリ	絶滅危惧II類	希少種	絶滅危惧II類	希少種		
13		ウサキコウモリ						
14		テングコウモリ	絶滅危惧II類	減少種	地帯別危惧 準絶滅危惧	希少種		
15	ネズミ	ニホンリス						
16		ホトモモンガ	準絶滅危惧	減少種	地帯別危惧 準絶滅危惧	地域限定種		
17		ムササビ						
18	ヤマネ	ヤマネ	準絶滅危惧	減少種	準絶滅危惧	地域限定種		
19	ネズミ	スミスネズミ						
20		ハウネズミ						
21		ヒメネズミ						
22		アカネズミ						
該当種数			5	10	14	10		1

表3 定量調査で確認されたネズミ類 (個体数/50個)

St.	調査地の名称	ヒメネズミ	アカネズミ	スミスネズミ	ハウネズミ
St. 1	高山 (森林限界)	10	0	1	0
St. 2	亜高山アカマツ自然林	13	0	0	0
St. 3	亜高山シラビソ自然林	20	0	0	0
St. 4	山地帯ブナ林	8	9	2	0
St. 5	溶岩帯カエデ林	18	4	0	0
St. 6	溶岩帯アカマツ自然林	13	0	0	0
St. 7	山地帯二次草原	0	6	0	0
St. 59	山地帯二次草原	5	15	0	12

とが知られており、溶岩のような固い土壌を好まないことを反映していると思われる。スミスネズミ *Eothenomys smithii* については、その生息数は、ヒメネズミやアカネズミに比べて極端に少ないが、森林環境を好み、体型的に似ているハタネズミは、森林ではなく草地を好むことがわかる。また、同じ山地帯二次草原でも共通調査地点 St. 7 では、アカネズミ 6 個体のみでの採捕の結果となったが、基質や管理方法の違いから樹木も少ないため、ネズミ科動物にとっては住み難い環境となっていると考えられる。

文献

阿部永 編(1994)日本の哺乳類. 東海大学出版会.
 阿部永・横畑泰志 編(1998)食虫類の自然史. 比婆科学教育振興会.
 日高敏隆 監(1996)日本動物大百科 1 哺乳類 I. 平凡社.
 今泉忠明(1992)富士山. 同文書院.

今泉吉典(1960)原色日本哺乳類図鑑. 保育社.
 神奈川県レッドデータ生物調査団 編(1995)神奈川県レッドデータ生物調査報告書. 神奈川県植物誌調査会.
 環境庁(1993)日本産野生生物目録脊椎動物編. 自然環境研究センター.
 環境省(2002)レッドデータブック脊椎動物編. 自然環境研究センター.
 前田喜四雄(2001)日本コウモリ研究誌-翼手目の自然史. 東京大学出版会.
 毛利孝之(1988)コウモリ捕獲法. 哺乳類科学.
 埼玉県(2002)改訂・埼玉県レッドデータブック 2002.
 東京都(1998)東京都の保護上重要な野生生物種.
 内田照章(1985)こうもりの不思議. 球磨村森林組合.
 吉行瑞子(1971)富士山総合学術調査報告書. (株)富士急行.